令和６年度実績報告書

令 和 7 年 3 月 3 1 日
北海道大学アイヌ共生推進本部

１．はじめに

アイヌ共生推進本部（以下「本部」という。）は、アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するため、本学における施策を企画立案し、学内外のアイヌ民族とその他の本学構成員の共生を実現するために令和４年４月に設置された。

令和６年度は、令和５年度に引き続き、「学生への教育」「教職員への研修」「文化振興」「歴史的経緯の語り継ぎ」「レイシャル・ハラスメント対策」の５施策について、アイヌ民族に関する知見を有する本学の教員等から構成されるアイヌ施策検討委員会を中心に、以下に掲げる事業を行った。

２．各種施策

(1) 学生への教育

本学にはアイヌ民族にルーツを持つ学生・教職員が所属しており、大学構成員全体がアイヌ民族に関する理解を深めることで、これらの学生・教職員が安心して勉学や教育研究に専念できる環境を整備することができる。また、道外や国外からも多数の学生を受け入れている本学において、全ての学生がアイヌ民族について学ぶ機会を設けることは、差別のない民族共生社会の実現にも貢献すると考えられる。令和６年度は、以下に掲げる３事業を行った。

① 学部教育への参画

令和５年度学部入学者から１年次の必修科目となった全学教育科目「導入科目（北大での学び）」の中で、アイヌ民族に関する講義を行った。講義は多様性をテーマとした枠の中で実施し、「アイヌ民族と大学の和解を目指して」というトピックのなかで、「アイヌ史の舞台としての札幌キャンパスの歴史」や、「民族多様性と先住民族」に関する内容を取り上げた。本科目には、令和７年度以降も継続して参画する予定である。

（講義の様子）

② 大学院教育への参画

令和 6 年度から実施の「大学院共通授業科目：社会実装プログラム群（北大大学院での学び)」の中で、アイヌ民族に関する講義を行った。講義は北大の歴史と多様性をテーマとした枠の中で実施し、「民族平等を考える」というトピックのなかで、「アイヌ民族との和解と共生に向けた本学の取組」や、「アイヌ史の舞台としての札幌キャンパスの歴史」、「安心な学内環境実現へ向けての留意点」に関する内容を取り上げた。本科目には、令和 7 年度以降も継続して参画する予定である。

（講義の様子）

③ 北図書館におけるアイヌ関連書籍の展示

5 月 27 日から 6 月 28 日までの間、附属図書館北図書館との合同企画として、北図書館東棟 2 階の展示コーナーにおいて、アイヌ関連書籍を展示する「本から学ぶアイヌ民族のことば、暮らし、歴史、交流　カンピヌカラアン ロ　ーイタㇰ、ウレシパ、ウパシクマ、ネㇷ゚キ、ウコアㇷ゚カシー」を実施した。

展示書籍はアイヌ施策検討委員会の委員が選び、計 41 冊を閲覧に供した。

（展示の様子）

(2) 教職員への研修

本学は、令和元年度に笠原総長職務代理（当時）が発表した声明において、研修等を通じてアイヌ民族に関する教職員の理解を深めることを表明しており、令和元年度から毎年、研修を実施している。令和 3 年度以降は、研修の対象者を、非正規職員も含めた全教職員（約 8,000 人）に拡大している。

令和６年度における研修は、

① 共生社会に向けた変革をめざして
（アイヌ共生推進本部　山本文彦本部長）

② サクシュコトニ川のほとりから考える札幌キャンパスの歴史
（文学研究院　谷本晃久教授）

③ 国のアイヌ政策の動向　（アイヌ・先住民研究センター　落合研一准教授）

④ 安心な学内環境のために
（アイヌ・先住民研究センター　北原モコットゥナシ教授）

⑤ 差別や偏見のないキャンパスの実現にむけた取組
（アイヌ共生推進本部　岡田真弓本部長補佐）

⑥ マイノリティに開かれた環境とは
（アイヌ・先住民研究センター　北原モコットゥナシ教授）

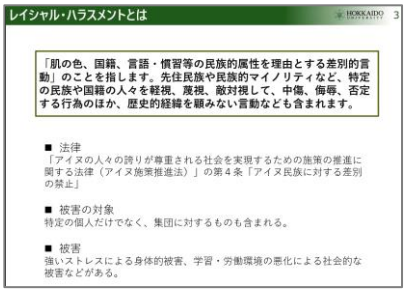
⑦ 民族的アイデンティティと大学環境
（アイヌ・先住民研究センター 山﨑幸治センター長/同センター元技術補佐員）

の７編をオンデマンド配信した。このうち⑦は、令和６年度に新たに開講し、当該研修はアイヌにルーツを持つ方への鼎談型インタビューの形式を取り入れ、受講者が複眼的に研修内容を捉えられるよう配慮した。

研修期間は 10 月 16 日から 12 月 16 日までであり、これまでの視聴者を含めると、令和６年度在籍者のうち 2,494 名が受講した。これは、令和５年度受講者の 1,769 名に比して 41％の増加であった。また、受講後のアンケートとして 137 件の意見が寄せられた。

研修動画及び資料は、研修期間後も視聴できるように学内限定サイトに掲載し、すべての研修動画について英語字幕版を用意した。

更に、令和５年度から新規採用された正規職員が対象の「北海道大学初任職員オンデマンド研修（北大学）」のカリキュラムにおいてアイヌ民族に関する研修を必修化し、引き続き令和６年度も実施した。



（研修の様子）

(3) 文化振興

キャンパス内でアイヌ文化に親しむ機会が確保されていることは、アイヌ民族にルーツを持つ学内構成員にとっては安心な環境の確保につながる。また、それ以外の構成員にとっても民族文化への理解がより深まることが期待される。令和６年度は、以下に掲げる４事業を行った。

① アイヌ料理フェアの開催

北海道大学生活協同組合との共催で、学内の８つの食堂において、アイヌ料理を提供するフェア「イペアン　ロㇰ！」を開催した。

アイヌ民族の食文化は、周囲の文化との交流から得た品々によって新たなアレンジを加えながら育まれてきたものであり、メニュー開発にあたっては、伝統料理に詳しいアイヌ民族の意見をもとに、試食会を行った。試食会には、アイヌ文化に興味のある本学の学生有志も参加し、メニュー内容や企画名について意見交換を行った。また、メニューの説明を記載したポスターの英語版も作成し、アイヌ民族の食文化が幅広い構成員に伝わるための工夫を行った。

［開 催 日］　令和６年７月１６日（火）～７月１９日（金）
［提供料理］　・ユㇰカㇺ（鹿肉）のオハウ
・イナキビご飯
・ラタㇱケプ（和え物）
・チタタプ風チポロ（いくら）丼

オハウ

イナキビご飯

ラタㇱケプ

チタタプ風チポロ丼

② アイヌ文化振興モニュメントの作成

学内におけるアイヌ民族の存在感を高めるとともに、本学構成員がアイヌ文化を自然に受容する環境を創出し、それによってアイヌ文化が承認された（そこにあることが自然に感じられる）環境を実現するため、学内に設置するためのモニュメントの作成に着手した。令和６年度は、モニュメントの作成を依頼したアイヌ工芸家の方とともに、デザインの打ち合わせ、モニュメントに使用する材料を選定し、切り出しをした。なお、モニュメントの材料は、本学北方生物圏フィール

ド科学センターの雨龍研究林に協力を得て、同研究林に自生するセンノキの中でも有数の大木（最低限樹齢約 450 年、胸高直径 98ｃｍ）を使用することとした。

（選定したセンノキ）

（伐採の様子）

③ 本学広報誌におけるアイヌ語の併記について

本学が発行する主要３広報誌「概要」「統合報告書」「サステイナビリティレポート」のタイトルについて、アイヌ民族を重要なステークホルダーとして認識していることを示すため、アイヌ語の併記を実施した。また、アイヌ語を併記した趣旨が読者に正確に伝わるよう、各広報誌の裏表紙等に趣旨説明文を記載した。

（各広報誌表紙）

④ 北海道大学病院ウェブサイトへのアイヌ語メッセージの掲載

北海道大学病院では、民族や国籍にかかわらず、すべての患者さまに平等な環境で医療を提供することを目指しており、この土地の先住民族であるアイヌの言葉が学内の日常となるとともに、当院がアイヌにルーツを持つ患者や職員にとっても安心できる空間となるように、との想いから、北海道大学病院ウェブサイトにおいて、病院長挨拶としてアイヌ語でのメッセージを掲載した。

(4) 歴史的経緯の語り継ぎ

上述のとおり、「学生への教育」及び「教職員への研修」として、アイヌ民族と本学の多様な歴史的つながりに言及し、本学の構成員として必ず理解すべき事項として説

明を行った。

また、アイヌ民族と本学キャンパスの歴史に関する学内叙述を収集するとともに、新たな研修コンテンツの開発について検討を行った。

(5) レイシャル・ハラスメント対策

本学ではアイヌ民族を含む様々な民族的な背景を持つ学生や教職員が勉学や研究、職務に励んでおり、こうした学生・教職員が、差別や偏見に遭うことなく安心して活動できる環境を整備するため、民族的属性を理由とする差別的言動であるレイシャル・ハラスメント、特にアイヌ民族に対する差別的言動を防止するための情報（ガイドライン「レイシャル・ハラスメントを防止するために」）をコンパクトにまとめたリーフレットについて、教職員及び令和６年度新規学部入学生全員を対象に配布した。また、当該リーフレットの英語版を作成し、本部のウェブサイトにオンラインで掲載した。

また、令和６年 11 月に国立アイヌ民族博物館で開催された「アイヌ文化でつながる博物館等ネットワーク（プンカㇲ）」の研修会において本部の教員が講師を務め、本学でのレイシャル・ハラスメントへの取組事例を交え講演した。

３．アイヌ民族との対話

各施策の企画立案・実施に活かすため、アイヌにルーツを持つ学生・教職員等と計２回、対話を行った。対話のテーマは、「アイヌ民族である学生・教職員が安心して教育研究に専念できる環境の整備」「歴史的経緯の語り継ぎ施策に関するヒアリング」であった。

４．おわりに

令和６年度においては、上記のとおり「学生への教育」「教職員への研修」「文化振興」「歴史的経緯の語り継ぎ」「レイシャル・ハラスメント対策」のそれぞれに一定の進捗が見られた。特に、必修授業の実施、研修受講者の大幅な増加、アイヌ文化を身近に感じられる料理フェア等の実施、広報誌による対外的発信、レイシャル・ハラスメント対策を行えたことは、重要な成果だったといえる。

令和７年度においては、これらの実績を引き継ぎ、研修内容の充実、文化振興に関する具体的施策の推進等について、引き続き事業を進めていく。